

私の大好きなおばあちゃん

南部中・2 木俣 朱織

私は今、青く雲一つない空の下でばあちゃんと植物を見ている。ばあちゃんの右手には太陽が反射してピンクに輝く、桜のマークのついた杖がしっかりと握られていた。

ばあちゃんは昔から、よく家に遊びに来てくれた。豊田市から来るたびに、私の大好きなチョコレートのお菓子をたくさん持ってきてくれた。私が出場するバスケットボールの試合を観に来てくれたり、一緒にお出かけしたり、私はそんな優しいばあちゃんが大好きだった。

ある日、家に帰るとお母さんが慌てた様子で二階から降りてきた。

「ばあちゃんが足が痛くて病院に行ったら、リウマチだったって。」私はよく分からなくて、リウマチについて調べた。リウマチは、関節が炎症を起こし、軟骨や骨が破壊され、放っておくと関節が変形してしまう病気のこと。重い荷物を長時間持ったり、長時間の歩行をしたりと、関節に負担がかかることは、なるべく避けることが大事なこと。私は驚いた。いつも元気だったばあちゃんがまさか病気になるなんて思ってもなかった。家族もみんな驚いていた。妹は不安そうな顔をしてお母さんの方を見ている。夏休みにばあちゃんも一緒に行っている旅行のことを気にしているように見えた。

「これからは家に来るのは無理そうだね。」

とお母さんが言った。足に負担をかけられないから長距離の運転があまりできない。いつも当たり前のように家に来てくれたばあちゃんもう来れない。中学生になり、部活やテストで忙しくなった私にとって、ばあちゃんと合える唯一の手段だったのに。ばあちゃんの家が隣だったらよかったのに。悲しい。病気のせいで体調が悪く

なったりしたらどうしよう。歩けなくなったらどうしよう。たくさん不安で頭がいっぱいになった。

「今週の土曜日、久しぶりにばあちゃんの家に行こうか。」

私の顔を見て、何か気づいたのだろうか。お母さんが言った。いつもだったら、とても嬉しいはずなのに、あまり喜べなかった。私は嬉しい気持ちと不安でいっぱいだった。

土曜日、私はいつもより早く起きて、家族の誰よりも早く準備をした。今日はばあちゃんに会いたい気持ちでいっぱいだった。ばあちゃんのことばかり考えていて、行くまでの道のりがいつもより長く感じた。

インターホンを鳴らすと、

「はい。」

懐かしくて優しい声が聞こえた。ばあちゃんだ。でも玄関に姿はない。

「開いているから入ってきて。」

私は玄関を開けて、ばあちゃんがいつもいる台所に向かった。すると、そこには椅子に座ったばあちゃんの姿があった。隣の机の上には、私の好きなお菓子が置いてあった。よかった。久しぶりに見たおばあちゃんは、いつもと変わらなくてほっとした。でも、やっぱり足は悪そうで、椅子から立ち上がることは一人ではできなくなっていた。

「ごめんね、心配かけて。」

ばあちゃんの顔はどこか悲しそうで、元気がないように感じた。ばあちゃんのために何かできることはないだろうか。いつも私たちに会いに来てくれたおばあちゃん。何かしてあげたい。私はたくさん考えた。そうだ、杖をあげるのはどうだろう。おばあちゃんとまた一緒にお出かけができるかもしれない。私はお母さんに頼んで、杖を買いに行くことにした。

日曜日、杖をかうためにモールに行った。介護用品店にいったの

だが、なんだか緊張して入りにくかった。杖を買うなんて初めてのことだ。何を見たらいいのか、値段はどのくらいするのか、分らないことだらけ。店に入ると、色々な形をや模様の杖がたくさん置いてあった。曲がっている杖、折りたたみの杖、持ち手がしっかりしている杖、種類が色々ありすぎて、どれをかったらいいのか分からない。今まで自分には関係のないことだと思っていたから、いざ買うとなると迷う。困ってお母さんに相談すると、

「一生懸命悩んで選んだものなら、どれでもばあちゃんは喜ぶよ。」と言われた。私はたくさん考えた。時間を忘れて店内を回っていると、一番端に掛けられていた一本の杖が目に入った。ピンクの杖。周りの杖とは違って輝いて見えた。桜はばあちゃんが一番好きな花だ。私はこれだ!と思った。

自分で選んだ杖を渡して、ばあちゃんが喜んでくれるのか、ドキドキしながらばあちゃんに渡すと、

「かわいい杖だね。ありがとう。」

と優しく笑ってくれた。

杖を渡してから、ばあちゃんは散歩するときにも、買い物に行くときにも、どこへ行くときも、杖を握っていた。今年は中止だと思っていた旅行も行くことができた。以前よりも出かける時間は減ったけれど、ばあちゃんとの時間を大切にしていこうと思うようになった。杖を買ってよかった。これからは、私がばあちゃんのためにできることをしよう。そう強く思った。

それ以来、私は人のために動くことは大切なことだと思うようになった。出かけた先で、前を歩いていたベビーカーから靴下が落ちるのを見て、急いで拾って声をかけた。すると、お母さんは、一瞬驚いた顔をして、

「ありがとう。」

と笑顔で言った。

以前の私なら、声をかけられず、黙ってみているだけだったかも

しれない。けれど、お母さんと赤ちゃんの笑顔を見て、気持ちよかった。

もしかしたら、相手が迷惑だと感じることもあるかもしれない。けれど、これからは自分を信じて自分がよいと思ったことはどんどんやっていきたい。